令和７年度　自己評価・学校関係者評価報告書

令和８年３月１０日

学校法人小牧外山学園　とやまこども園

１．本園の教育目標

自分で考え行動し、なかまと共に育ち合う

２．本年度重点的に取り組む目標・計画

環境に関する理解を一層深め、子どもと共に考え主体的に取り組む保育を推進し、日々の生活や遊びの中で実践する力を育む。また、乳幼児期の発達過程を見通した学びと育ちについて、研究・研修を重ね、保育の質の向上を図る。さらに、保護者との信頼関係を基盤とし、子どもの育ちを共に喜び合いながら、家庭と園とが連携した支援の充実を目指す。

３．評価項目の達成及び取り組み状況

	評価項目	具体的な取り組みと自己評価
1	保育環境 環境についての知識をさらに深め、子どもたちと共に考え合い、実践していく。	子どもの興味や遊びの広がりに応じて保育室の環境を見直し、試行錯誤を重ねながら環境の再構成に取り組んできた。子どもたち自身も環境づくりに関わることで、主体的に遊びに向かう姿に繋がった。また、ECEQ の公開保育に参加し、他園の実践から学ぶとともに、園内でも職員間で学びを共有し共通理解を図りながら保育に活かすことができた。乳児クラスでは保育室の空間に区切りを設けコーナーを設定したことで、子どもたちが落ち着いて遊び込む姿が見られるようになった。
2	保護者としての専門性 乳幼児の発達を見通した学びや育ちの理解について、研究・研修を行う。	日々の保育の中で感じる悩みや事例を職員間で共有しやすい環境づくりを意識したことで、他の保育教諭の考え方や実践を知る機会が増え、互いに学び合うことができた。また、遊びや生活の場面を単に「楽しい経験」として終わらせるのではなく、それがどのような力の育ちに繋がるのか、遊びの中の学びの意味を捉える視点を持つことを意識して園内研修を行い、保育の質向上に繋げることができた。
3	子育て支援 保護者と共に、子どもの成長を喜び合えるよう寄り添っていく。	乳児クラスでは、連絡帳に加えて遊びの様子を写真付きの新聞として発信したことで、園での生活の様子をより具体的に伝えることができ、保護者との情報共有やコミュニケーションのきっかけづくりに繋がった。また、ポートフォリオを通して家庭での様子や保護者の思いを知ることができ、子どもの育ちについて相互理解を深める機会となった。 学年やクラスを越えて多くの保育教諭が子どもたちの遊びや生活に関わっている為、担任だけでなく様々な職員が保護者に子どもの姿を伝えていくことを意識し、園全体で子どもの育ちを支えていることを発信した。

４．総合的な評価結果

保育環境の見直しや園内研修を通して、子どもが主体的に遊びや生活に関わる保育の充実に取り組んできた。子どもの興味や発達に応じて環境を再構成することを意識したことで、子どもたちが自ら環境に関わりながら遊びを広げていく姿が多く見られるようになった。また、公開保育への参加や園内の学び合いを通して、遊びや学びの意味を捉え直し、職員間で共有しながら保育実践に活かすことができた。さらに、写真新聞やポートフォリオなどを活用した情報発信を通して、保護者と子どもの育ちを共有し、信頼関係を深めることにもつながった。

一方で、子どもの姿をより深く理解し、保育環境や援助をさらに充実させていくためには、職員同士の事例検討の充実や関係機関との連携を深めることが必要である。また、子どもの学びや育ちの過程をより分かりやすく保護者に伝えていく工夫も今後の課題として挙げられる。

これらを踏まえ、子ども一人ひとりの姿をより丁寧に捉えながら保育環境の充実を図るとともに、園全体で組織的に保育の質向上に取り組んでいく。また、保護者との対話を大切にしながら、子どもの学びや育ちの過程を分かりやすく発信し、家庭と園が相互に理解を深めながら子どもの成長を支えていく連携体制の充実に努めていく。

５．今後取り組む課題

	課題	具体的な取り組み
1	保育環境	安心を基盤とし、その時々の子どもの姿や興味関心を踏まえ、子どもが自ら挑戦したくなる環境を再構成し、主体的な遊びに繋がる環境の充実を図る。
2	子ども理解	子ども一人ひとりの行動の背景や育ちを丁寧に捉え、事例検討や関係機関との連携などを通して子ども理解を深め、適切な援助や支援に繋げていく。
3	情報発信	保護者との対話を大切にしながら、子どもの学びや育ちの過程が適切に伝わるよう、発信方法を工夫していく。

６．学校関係者評価委員会の評価

・子どもたちが主体的に取り組む中で、保育教諭が遊びの場ごとに目を配りながら適切に配置されており、子どもが安心して遊び込める環境が整えられていた。
・保育教諭が子どもの行動をすぐに制止するのではなく、見守りながら必要に応じて声を掛けることで、子どもが自ら挑戦しようとする気持ちを大切にしている保育が行われていた。
・異年齢で関わりながら遊ぶ中で、年上の子どもに憧れたり、互いに教え合ったりするなど、子ども同士が学び合う姿が多く見られることや、片付けの時間には特別な合図がなくても自然に片付けが行われている様子から、日頃の生活の積み重ねが感じられた。
・支援を必要とする子どもへの理解や関わりについては、今後も研修や園内での学びを通して理解を深めていくことが望ましい。